

バルセロナ滞在記

淵野 昌

中部大学特別研究費 S55A の部分的な補助を受けて、2006 年の 2 月の初めから 3 月の初めにかけてスペインのバルセロナにある Centre de recerca matemàtica (略称: crm) 数学研究所に滞在した。以下はこの滞在にまつわる雑記である。



バルセロナ大学での数理論理学セミナーにおける講演

ドイツに住んでいたころは、ポーランドやチェコやスロバキアなどの数学の研究グループからたびたび招待を受けたし、国際会議にもよく出席していたので、外国(つまり日本でもドイツでもない国)に滞在することが多かったのだが、日本に移住して以来、めったに外国に出なくなってしまうていた。特に今回のように一ヶ月も外国に滞在するのは日本に移住して以来初めてである。人間年をとると適応能力が落ちて言葉の通じない場所で生活するだけの柔軟性がなくなってしまうがちである。実は出発するまでこのことがかなり不安だったのだが、どうやら老化は思ったほど進んでいなかったようである。もちろん、私の招待をアレンジしてくれた Joan Bagaria 教授夫妻をはじめ、色々な人に助けてもらったからでもあるが(特に Bagaria 教授の奥さんは crm の秘書をしているので、大変お世話になった)、快適に生活でき、数学の研究にも専念できた。2月と3月は比較的数学の研究に使える時間が多い時期なのだが、いつも、数学の研究モードへの頭の切替えに失敗してしまい、期待したほど仕事が進まないことが多い。思いきって環境を変えてみることも悪くないようである。

バルセロナに出発する前にもう1つ不安に思ったのは、喫煙率が高いらしい、ということだった。これは行ってみると実際にそうで、こちらの学生の喫煙マナーのひどさは歩きタバコはするわ、禁煙マークの真下で吸うわ、と名古屋周辺の大学とあまりかわらない感じだった。幸にも crm は全面禁煙であったし、大学の食堂などもあらかた禁煙だったため、それほど不愉快な思いはせずにすんだのだが。

ついでながら、日本では「この国の伝統だから」というのが喫煙擁護派や捕鯨擁護派のよく持ちだす理屈だが、捕鯨はともかく、喫煙の伝統という点では、日本よりスペインの方がずっと先輩である。なにしろ意欲にもえるコロンブスがアメリカ大陸を発見したときの船員が原住民からもらって吸ったのが最初に喫煙したヨーロッパ人と言われているわけであるから。日本へはスペイン人が東南アジア(バタ

ビアかどこか)に持ちこんだものから伝わったらしいので、100年以上の時差があるのではないかと思わる。しかし、聞いてみたところではスペインの喫煙擁護派は「伝統だから」という論点からは反論していない、ということであった。しかし「伝統だから」というのは、闘牛は野蛮だからやめろ、という議論に対する反論としてはよく聞く文句であるということである。

日本人が外国で生活することの利点は色々ある。特に、私にとっては、いわゆる欧米では日本人は若く見られるというのが、かなり得なことに思える。日本のような農耕社会型年功序列のある場所だと、若く見られるのは若造あつかいされることであって得というよりどちらかと言えば損なのだろうが、数学は新しい定理の証明を追いもとめる狩猟社会なので、若く見えるのは、優秀な若い人たちに対等に扱ってもらえる可能性が開ける、という意味で、かなり得と言える。もちろん対等に扱ってもらうには、それ相当の能力を示さなくてはいけないわけなので、これは年寄にとっては苦しいことであるわけなのだが、今回の滞在でも、Bagaria 教授の御弟子さんたちや、crm に滞在していた若いポストドク研究者たちとも楽しくつきあうことができたのは大きな収穫であった。

今「数学は定理を追いもとめる ...」と書いたが、crm というのをこちらの人が発音すると、“th” の発音が苦手な日本人が theorem (定理) という英単語を発音したときの音に非常に似ているのは面白い。私とほぼ同じ時期に crm に滞在していたヴィーン大学の Sy Friedman 教授にこのことを話すとドイツ語の “Theorem” もかなり発音が近いのではないかと指摘された (“th” の音は現代ドイツ語にもない)。

crm は、常駐の研究者はほとんどおらず、主に数ヶ月から一年単位で滞在する客員研究員で構成されている。バルセロナ大学などから来ている国内の客員研究員もいるが、多くは外国からの研究者である。私は単独の客員研究員であったが、一年にいくつかの研究テーマについてのプロジェクトが組まれるので、そのプロジェクトに関連する分野の研究者が複数滞在することが多いようである。crm のオフィスのドアにはガラス窓がついているので、通りがかりにのぞくと、皆、夜遅くまで活発に議論をしているようだった。前出の Friedman 教授が研究しているテーマについては、私がちょっと勉強不足だったこともあって、あまり踏み込んだ数学のディスカッションをすることはできなかったが、ブタペストのレニイ数学研究所の Lajos Soukup 教授が私の滞りに合わせてバルセロナ大学に滞在するスケジュールを組んでくれたので、彼とは何度も会って研究に関する議論をすることができた。Soukup 氏には、2001年、中部大学に10日間ほど来て頂いたこともある。私の共著者の中ではいままでいちばん沢山一緒に仕事をしてきた人である。特に Bagaria 氏はこの時期、会議などで忙しく、あまり会う時間がとれなかったので、Soukup 氏が私に合わせてバルセロナに滞在してくれたのは非常にありがたかった。

バルセロナといえばミロやガウディが一番に連想される。特に、ガウディの建築

を見ることは中学生のころからの夢であったし、ミロも十代の一時期一番好きな画家だったこともあった。しかし、今回の滞在では、ガウディの建てた建造物にも、ミロ美術館にも、意識的に行くことを避けてしまった。これは私がまた来たい場所にかけるおまじないの一種である。つまり、... をまだ見ていないのだから、ここにはまた来なくてはいけない、という再訪の言いわけを作っておくわけである。この話をしたら、デュッセルドルフから来た数学者の奥さんに「ガウディの建築を見ると、そのすばらしさに感激してまた来なくてはいけなくなるのだ」と即座に言いかえされた。多分それも本当だろう。そういうわけで今回スタンダードな観光名所には足をはこばなかったが、Bagaria 氏や、Soukup 氏のホストの Juan-Carlos Martínez 教授には、普通の外国人観光客は行かないようないろいろな場所につれていってもらった。特に Bagaria 教授からは家族ぐるみで歓待してもらい、家に招待されたり、コスタ・ブラバで一緒に週末を過したりした。



Bagaria 教授夫妻とジローナの郊外にて

土地の言葉ができず英語でコミュニケーションをとると、招待してくれた方とは話ができて、その人の家族とは言葉が通じないということになることも多いが、幸、Bagaria 一家はアメリカに暮していたこともあるので、息子さんもお嬢さんも大変英語が達者で、色々と話ができたのはよかった。

Bagaria 氏の子供たちと話してみても驚いたことの1つは、日本のマンガやアニメがスペインでも大変ポピュラーだということである。クレヨンしんちゃんが物議をかもしているという話は Bagaria 教授の研究グループの Asperó 氏が以前日本に来たとき既に聞いていたが、Bagaria 教授の大学生の息子さんが「なにしろ僕たちはドラえもん世代だからね」と言ったのには笑ってしまった。



crm のあるバルセロナ自治大学のキャンパス

滞在中、バルセロナの作曲家であるモンポウの自作自演の CD を買ってすっかりはまってしまった。帰る間際には春が近づいて、黒つぐみが鳴きだした。滞在最後の日には、おみやげを買いに奔走した...。書き出したらまだいくらでも書けそうな気がしてきたが、紙数もつきたので、このへんで筆を置きたい。